

# 能《源氏供養》制作の背景―石山寺における紫式部信仰

小林 健 二

要旨 能《源氏供養》は「源氏供養草子」を典拠としていることが指摘されていたが、《源氏供養》は石山寺を供養の舞台とし、また供養の依頼者である紫式部が実は石山の観音であったという大きな相違を有する。本稿では、石山寺という紫式部伝承の磁場に注目し、紫式部が観音の化身であったとする言説や、源氏の間という特殊な宗教空間、崇拝の対象となつたであろう紫式部画像、そして歌人達の紫式部を尊崇する文芸行為を通して、石山寺において源氏供養がなされた可能性を追究し、《源氏供養》が制作された背景の一斑について考察した。



《源氏供養》は、『札河原勸進猿樂日記』によると寛正五年（一四六四）四月五日の勸進能で観世又三郎が演じたのが記録上の初出であり、十五世紀の半ばには成立していた能である。能勢朝次氏の「演能曲目調査資料」によると慶長までに五〇回の演能記録が見え、室町期を通じての人氣演目であった。（1）作者付け資料を見ると、観世長俊の直談を古田兼将が編した大永四年（一五二四）奥書の『能本作者注文』には「世阿弥作」とし、永正十三年（一五一六）常門孫四郎の奥書を有する金春系作者付『自家伝抄』では「世阿弥作」「禅竹作（但し異作）」と重出するものの、すでに先学が述べるように世阿弥や禅竹の作とは考えられず、作者については未詳としか言いようがない。

その構成と梗概を新潮日本古典集成『謡曲集』に所収される《源氏供養》の前付けに従って示すと次の様である。（2）

- 1 ワキの登場 安居院法印（ワキ）と従僧（ワキ連）が石山寺に参詣する。
- 2 シテ・ワキの応対 道すがら里の女（シテ）が忽然と現れ、法印に源氏の供養を頼み、自分が紫式部であることをほのめかして消える。
- 3 アイの物語り 所の男（アイ）が紫式部のことを語る。
- 4 ワキの待受け 法印は石山寺で源氏供養し、紫式部の菩提を弔おうとするが、半信半疑で躊躇う。
- 5 後ジテの登場 紫式部（後ジテ）が舞装束の姿で恥じらいつつ、登場する。
- 6 ワキ・シテの応対 紫式部は素性を明かし、法印は源氏を供養する。
- 7 シテ・ワキの応対 紫式部は供養の布施を申し出るが、法印はそれを謝絶して舞を所望する。紫式部は前奏舞

を舞う。

8 シテの語り舞 紫式部は『源氏物語』の巻名を織り込んだ源氏表白に基づく観無常欣求浄土の曲舞を舞う。

9 シテの詠嘆 紫式部は回向の力を頼み、無常の世を詠嘆する。

10 結語 紫式部は石山観音の再誕であり、源氏物語は無常告知の方便であると告げる。

右のように全十段から成るが、構成の頂点は『源氏物語』の巻名を織り込んだ源氏表白の曲舞を歌い舞う第8段になろう。源氏表白の曲舞こそが本曲の中心であり、見せ所となるのである。なお、ワキの安居院法印は、本説となる『源氏供養草子』によると、安居院聖覚のことと考えられる。聖覚（仁安二年（一一六七）～嘉禎元年（一一三五））は澄憲の息で、父の拓いた唱導説法の道を嗣いで名手といわれ、『源氏表白』の作者とされる人物である。『源氏表白』は源氏供養の際に唱えられたもので、『源氏物語』の巻名を織り込んだ仮名文の表白文である。

これまでの『源氏供養』の研究としては、小西甚一氏「作品研究「源氏供養」」があり、「本曲が『源氏物語』の表白を典拠として構想されたのは、疑いのない事実であろう」と、その典拠として『源氏表白』であることを確認された。<sup>③</sup>その後、伊藤正義氏は「『源氏供養』解題」において、

『源氏供養』がこの『源氏物語表白』に基づいて作られたとするのは、『謡曲拾葉抄』以来の通説である。たしかに本曲のクセは、『源氏表白』を抄出して書かれていることは疑いない。しかし、そのことと『源氏表白』が一曲の構想上の基盤となっているということとは、同一ではないのである。結論を先にすれば、『源氏供養』の直接的典拠としては、南北朝には成立していたと認められている『源氏供養草子』を比定したい。<sup>④</sup>

と、より直接的な典拠として『源氏供養草子』を提示された。その梗概を赤木文庫旧蔵甲本によつて次に示そう。

三月中旬のころ、安居院の聖覚が縁行道していると、貴く美しい女房と尼君とが訪れ、出家したものの『源氏物語』

が忘れられず、その『源氏物語』を料紙として『法華経』を書写したので供養してほしいと申し出る。そこで聖覚は即座に物語の巻名を織り込んだ『源氏表白』を唱えて供養したので、尼君たちは喜び砂金百両を包んで布施とした。二人の素性に不審を抱いた聖覚が帰る跡を付けさせたところ、尼君は法勝寺の東の裏、草川あたりに入っていった。この後、他の諸本では尼君の素性を「中関白の娘」「准三后」と明らかにする。

右の『源氏供養草子』と能《源氏供養》を並べると、〈安居院聖覚のもとに曰くありげな女性が訪れ『源氏物語』の供養を依頼し、聖覚はそれに応えて供養をする〉という基本的な構造は共通することがわかう。さらに、能の第8段の〔クセ〕の最後で、

夢の浮橋をうち渡り 身の来迎を願ふべし 南無や西方弥陀如来 狂言綺語をふり捨てて 紫式部が後の世を助け給へと もろともに 鐘打ち鳴らして 回向もすでに終わりぬ<sup>⑤</sup>

と鐘を打ち鳴らして供養を終えるところは、物語草子で尼公が「かねうちならして」と打鐘を再三請うことと、さらに、かれも、夢のうきはしの所なり、あさなゆふなに、来迎引接を、ねかひわたるへし、南無西方極楽弥陀善逝、ねかはくは、誑言き、よのあやまりを、ひるかへして、紫式部、六しゆの苦けんを、すくひ給へ、南無一乗妙典、当来たうし弥勒慈尊、てん法りんの、えんとして、これをもてあそはん人、ことくく、安養の淨利に、むかへ給へ、供養おはりぬれば、かねうち、つくへどりのけぬ<sup>⑥</sup>

と、供養が終わった後に鐘を打ち、經典を置いた机を取り除くことを受けての表現と思われる。これらのことから、伊藤氏の『源氏供養草子』典拠説は首肯すべきであろうが、両者を比べるとなお次のような重要な相違点があることも事実である。

▽源氏供養を行う場所が、草子では聖覚居室の持仏堂であるのに対して、能では聖覚が石山寺に参詣して、そこで

供養を行うことになる。つまり、石山寺が供養の場となること。

▽源氏の供養を依頼するのが、草子では読者である尼君であるのに、能では物語の作者である紫式部であり、実は石山の観音であったとする。紫式部が石山観音の化身であること。

他にも細々とした相違は見出されるが、突き詰めると一番の違いは右のように供養の場が石山寺であるということと、終曲において、

よくよく物を案ずるによくよく物を案ずるに 紫式部と申すは かの石山の観世音 仮りにこの世に現れて かかる  
源氏の物語 これも思へば夢の世と 人に知らせん御方便 げに有難き誓ひかな 思へば夢の浮橋も 夢の間の言葉な  
り

と一曲を結ぶように、供養の依頼者である紫式部が、実は石山の観音であったとするところであろう。つまりは石山寺における観音と紫式部が一体であるとする観音信仰が背景にあったと思われるのである。本稿ではその点に注目して、『源氏供養』が制作された背景に石山寺における紫式部に対する信仰があり、それを儀礼化した源氏供養の法会があった可能性を考察したい。

二 『源氏供養草子』の諸本

まずは能の典拠とされた『源氏供養草子』について概観しておこう。『源氏供養草子』の伝本は、松本隆信氏・徳江元正氏などにより早くから報告されていたが、伊藤正義氏が能の典拠として指摘された以降も、廣田収氏・伊藤慎吾氏・恋田知子氏によって新しい伝本が加えられ、現在次の九本の存在が確認される。それら諸本の位置づけを行っておく

ことは、能との関係を探るうえでも必要であろう。諸先学の説を勘案して系統別に示すと次の様である。

〔A系統〕

①赤木文庫旧蔵甲本、一軸。伝後崇光院筆（極札有）。外題なし。内題「源氏供養」。絵巻からの転写本。<sup>(7)</sup>

②藤井隆氏蔵本、承応二年（一六五三）写、一冊。後補題簽「源氏供養のさうし／付源氏表白」。内題「源氏表白」。本文七丁。仮名表白と合綴。<sup>(8)</sup>

③宮内庁書陵部蔵甲本、桂宮本。一冊。靈元天皇宸筆。外題「源氏物語表白 聖覚作」。本文九丁。<sup>(9)</sup>

④宮内庁書陵部蔵乙本、桂宮本。一冊。外題「源氏供養草子」。内題「源氏くやうのさうし」。本文八丁。③とほぼ同文。

⑤実相院蔵本、一冊。外題・内題なし。本文九丁。<sup>(10)</sup>

⑥島原図書館松平文庫蔵本、一冊。外題「源氏不審抄」。本文八丁。<sup>(11)</sup>

〔B系統〕

⑦赤木文庫旧蔵乙本、絵巻一軸。酒井抱一旧蔵。外題「源氏供養物語」。絵四図。箱書「絵詞 尊鎮法親王真跡」。<sup>(12)</sup>

〔C系統〕

⑧天理図書館蔵本、一冊。『国籍類書』第二八冊。元和・寛永頃の写。外題「源氏供養双紙」。本文三十九丁。<sup>(13)</sup>

〔D系統〕

⑨国立歴史民俗博物館蔵本、大永元年（一五二二）写、一冊。外題「源氏供養」。本文十丁。勸修寺、並びに田中讓氏旧蔵。<sup>(14)</sup>

以上、A～Dの四系統に分類され、中でもA系統の伝本が六本と多く、この系統が優勢であったことを窺わせている。最古本は①の伝後崇光院筆の赤木文庫旧蔵甲本だが、極札に記される後崇光院筆に確証はない。現在は行方不明で実

見できないが、『室町時代物語大成』の口絵写真からの印象では室町期の写本としてよさそうである。さらにこれが絵巻の詞書を転写したものであり、早くからこの物語が絵を伴って書写されていたことが窺われる点でも興味深い。(15)

B系統の赤木文庫乙本は挿絵四図を有する絵巻で、源氏供養の後に、尼君は聖覚を頻繁に召されるようになり浮き名が立ったという尾緒が付き、さらに一行阿闍梨の説話が付加されている。つまり、A系統をもとにより話が増幅しているのであるが、さらに物語化がなされたものがC系統の国籍類書本であり、供養の後に、

おたまきにはりをつくるごとくにあとをひかへてゆく程に……おんじやうじのひかしふるきやしろのまへにてこつぜんとしてうせ給ふきいのおもひをなしかたはらにたちよりある人に此ありさまをとひければこれはしゆくうの宮とそ申けれほうゑん聞召さてはいにしへのむらさき式部のばうれいやらんとたまいいよ／＼あはれをもよほし菩提をそとひ給ひける……さてはいし山の観世音せいかくけんし給ひしゆしやうさいとのためにほけきやうを供養し給ふとかや(16)

と、聖覚が供養を依頼した女性を紫式部の亡霊かと疑うところなど、能を踏まえたことを窺わせる表現となっている。注目すべきはD系統の歴博本である。大永元年(一五二二)の書写奥書を有し、年記を持つものでは現存本の中で最も古く、恋田知子氏が述べられるように、物語の展開は他本と変わらないものの、植物・器物に対する供養の様相がかなりの分量で説かれること、天台談義所である成菩提院二世慶舜作の『三十六人歌仙開眼供養表白』ならびに伝聖徳太子作の『明法抄・孔子論』と合写されること、勧修寺という寺院に伝来したことなどから、唱導色が極めて濃い伝本である。(17) 歴博本で重視すべきは、小峯和明氏が指摘されるように、他の諸本では法会を略して表白が唱えられるのに対して、源氏供養の法会の一環として唱えられていることである。すなわち小峯氏は「法会文芸としての源氏供養—表白から物語へ」において、



「三礼法則などをば略し給ひたりき。凡皆成仏道の妙理龍女得道の法門、細々と釈し給ひたりける。提婆品の讚談にいたつて、尼御前も袂をしほり、女房も涙を流し給へり。〈略〉鷲峯説法の春の花は五障三従の霞にはころび、龍女成道の秋の月は十如実相」云々と法会の次第が描かれ、聖覚と女房とが歌の贈答を交わし、「施主段」が浪々と語られ、源氏巻名を織り込んだ句が展開される。赤木本などでは、「三礼以下、常の事なれば」「三礼してけひうちならして」とあるだけで、すぐに源氏巻名句に移るが、歴博本では、法会の法則次第がたどられ、源氏巻名句は「施主段」の一環として提示される。法会の次第に即して叙述されることに注意したい。(18)

と、法会の次第の中で表白が唱えられ、より法会の実態に則した内容になっていることに注目されている。その意味では歴博本は『源氏供養草子』の本来の姿を伝えている可能性を有しており、他の諸本とは一線を画せると言えるのではないだろうか。諸本の展開を考える際に、歴博本からA系統、さらにB系統、さらにC系統へと位置づけることはなおも検討が必要であろうが、私案による一応の分類を示すと、歴博本をⅠ類とし、他本すべてをⅡ類と分けて原本整理をすべきと考える。ともあれ、本題からずれるので、能作者がどの伝本に拠ったかも含めて、詳しくは別稿で論ずることにした。

### 三 石山寺における紫式部伝承

#### 【紫式部墮地獄と源氏供養の伝説】

源氏供養、すなわち『源氏物語』を供養するという宗教行為の根底には、物語の作者である紫式部が妄語戒を犯した罪により地獄に墮ちたとする、紫式部墮地獄の思想があったことは言うまでもない。早くは平康頼の書いた『宝物集』

卷第五に、

ちかくは、紫式部が虚言をもつて源氏物語をつくりたる罪によりて、地獄におちて苦患しのびがたきよし、人の夢にみえたりけりとして、歌よみどものよりあひて、一日経かきて、供養しけるは、おほえ給ふらんものを。(19)

とあつて、十二世紀には紫式部が夢の中で墮地獄の苦患を訴え、歌人達が集まつて経（法華経であろう）を書写して供養をしたことが見え、十三世紀半ばに藤原信実が編んだ『今物語』には、

ある人の夢に、その正体もなきもの、影のやうなるがみえけるを、「あれはなに人ぞ」とたづねければ、「紫式部なり。そらごとをのみおほくしあつめて、人の心をまどはずゆゑに、地獄におちて、苦をうくる事、いとたへがたし。源氏の物語の名を具して、なもあみだ仏といふ哥を、巻ごとに入くによませて、わがくるしみをとぶらひたまへ」といひければ、「いかやうによむべきにか」と尋ねけるに、

きりつばにまよはんやみもはるばかりなもあみだ仏とつねにいはん  
とぞいひける。(20)

と、これも傍線にあるごとく、夢の中に式部が虚言故に地獄へ墮ちた苦しみを訴え、複数の歌人達が『源氏物語』の巻名を織り込んだ和歌を詠むことによつて、紫式部を供養したことが窺われる。

このように物語が作られて二百年も経たないうちに、作者の紫式部が地獄に墮ちた説が起こつてくるのであるが、一方では、これほど優れた物語を書いた式部は、ただ人ではなく観音の化身であろうという二律背反した思想も起こつてくる。平安時代末の嘉応二年（一一七〇）以降に書かれた『今鏡』の「作り物語の行方」には、『源氏物語』を書いた紫式部が妄語戒によつて地獄に墮ちたとする説の反論として、

この世のことだに知りがたく侍れども、唐土に白楽天と申ける人は、七十の巻物作りて、ことばをいろへ、たと

ひをとりて、人の心をす、め給へりなど聞え給も、文殊の化身とこそは申めれ。仏も譬喩経などいひて、なき事を作り出し給て、説き置き給へるは、ことに虚妄ならずとこそは侍れ。女の御身にて、さばかりのことを作り給へるは、たゞ人にははせぬやうもや侍らむ。妙音観音など申、やむごとなき聖たちの女になり給て、法を説てこそ、人を道引給なれ、などいへば、<sup>(21)</sup>……

とあるのがそれで、唐の白楽天が文殊の化身であることを引き合いにして、『源氏物語』の執筆は、妙音観音が仏法を説いて人々を導くために女人となって現れたと論じるのである。そして、観音化身説からの連想であろうか、紫式部が観音菩薩を本尊とする石山寺でこの物語を書いたとする説も早いころから語り伝えられていたようで、鎌倉時代後期の永仁三年（一二九五）頃の成立とされる『野守鏡』上には、「源氏物語も、紫式部のり申しけるによりて、石山の観音其風情をしめし給ひけるとなむ、申しつたへて侍る」<sup>(22)</sup>と、紫式部が石山の観音に祈念した利生により物語が成就したことが述べられており、阿仏尼は『庭の訓』で、「人丸赤人が跡をも尋ね、紫式部が石山の浪に浮べる影を見て、浮舟の君の法の師に逢ふ迄こそ難くとも、月の色花の匂も思しとどめて、埋れ、言ふ甲斐無き御様ならで、かまへて歌詠ませましまし候へ」<sup>(23)</sup>と、石山寺での物語創作を仄めかす表現をしているのである。

また、物語中の登場人物を系図の形で整理して書き示した『源氏物語古系図』の中で増補系とされる『伝為氏本源氏古系図』序の部分に「源氏物語のおこり」として、

源氏の物語のおこりは村上の御むすめ選子上東門院に御消息ありて春の日のつれ／＼に侍るにさるへき物語給はらんと申させ給へるに女院式部越前守為時女をめしていかなるをかまいらすへきとおほせられあはするに式部が申さく落窪岩屋などはめつらしけなくやあたらしくいて、御覽せさせたまひたらんは申させ給たるかひ侍りなんと申すにさらはおもひはからひてさもつくりいて、むやと仰られければこゝろみにもしやとて石山にまうて、い

のり申すに八月十五夜の月水海にうかひてあきらかなるをみて心のすみけるに(※)第三卷をことにたくひなくつくれりとして紫式部といはれたり(24)

と、紫式部が石山寺の観音に祈念して湖水に映る月影を見て物語を書き起こしたという、物語起筆説も語られるようになる。(25) 右の説は室町時代初期に作られた『源氏物語』の梗概書である『源氏大鏡』序の「物語のおこり」にも引かれる説で、(※)部分に「天台六十巻に表して、巻のかず(を)六十帖にさだめ、巻ごとに名をかへて、近代のうちにくらぶらしくもやさしからん事を此内に作入て、すゑの世につたへばやと思ふ心うかべる」(26)を加えて、伝えられるようになる。

この紫式部が観音の化身であるという思想と、紫式部は石山寺で源氏物語を執筆したという説は、『源氏物語』の注釈書の世界で融合することになる。南北朝期の貞治元年(一二三六四)に河内方である源親行が著した『原中最秘鈔』には、私云、此物語は内外典を始めとして、君子父子のた、ずまひ、夫婦兄弟のまじはり雲霞雪月のあそび詩歌管弦の道までもかきのこせる事なきか。凡以白居易之文集、比紫式部源氏と古来より申伝たり。詞の優艶更無比類ゆへ也。是をまなびば、仁義徳行の道にも達ぬべし。これをたしなまば菩提得脱のたよりともなりぬべし。しかればにや

或石山の観音の御ちかひにて作出したりともいへり。或は作者観音の化身とも云へり。(27)

と、紫式部が石山観音の化身であることが説かれ、同じく南北朝期の貞治年間初頭に足利義詮に献上された四辻善成著『河海抄』には、

此物語の起こりに説々ありといへども、西宮左大臣安和二年太宰権帥に左遷せられ給ひしかば、藤式部おさなくよりなれたてまつりて思ひなげきける比、大斎院(選子内親王)より、上東門院へめぐらかなる草子や侍ると尋申させ給けるに、うつほ・竹とりやうの古物かたりはめなれたれば、あたらしくつくりいだしてたてまつるべき

よし、式部におほせられければ、石山寺に通夜してこの事を祈り申けるに、おりしも八月十五夜の月湖水にうつりて、心のすみわたるまゝに、物かたりの風情空にうかびけるを、わすれぬさきにとて、仏前に有りける大般若の料紙を本尊に申しうけて、まづすま・あかしの両巻をかきはじめけり。これによりて須磨の巻にこよひは十五夜なりけりとおぼしいで、とは侍るとかや。のちに罪障懺悔のために、般若一部六百巻をみづからかきて奉納しける。いまに彼寺にありと云々。(28)

と、石山寺において紫式部が『源氏物語』を執筆した経緯を開陳し、さらに、

…或説云一条院の御めのとこの子也。上東門院へまいらせらるゝとて我ゆかりの物なり哀と思食せと申させ給けるゆへによりて此名あり。武蔵野の義也ともいへり。或又作者観音化身也云々。

と、作者(紫式部)が観音の化身である説をわざわざ書き加えるのである。

時代は下るが、天文二十四年(一五五五)に三条西公条が著した『石山月見記』は、公条達の石山寺での観月を伝え聞いた天竜寺の江心承董が贈った一文を載せており、それには、

洛城之東十余里程而有寺、曰石山迺如意輪観音堅坐之霊場也…仄聞昔紫式部懇祈有感而、作源氏五十四帖、丁三五佳辰而、始筆於須磨之卷矣、吁紫式部即白衣大士也、白衣大士即紫式部也、(29)

と、かつて紫式部が彼の地で『源氏物語』を執筆したことと共に、傍線部のように観音と紫式部の一体説が述べられている。さらに時代は下って、慶長七年(一六〇二)に近衛植家の息女花屋玉栄によって書かれた源氏の注釈書『玉栄集』では、

なにをわきまふる事もなく、ふつほうをもころがけず、ただ五よくにのみぢやくして、ざいごうふかき人をゑんよりひき入れて、ふつたうに入しめんために、いしやまのくわんをん女人にむまれ、むらさきしきぶとなり、

これをつくり給ふ。(30)

と、衆生を仏法に引き入れるために石山寺の観音が紫式部とあらわれて物語を作ったことが記され、観音が紫式部に化身して衆生を濟度するという『今鏡』以来の考えが石山寺を核として存続していたことを窺わせている。

以上、これまで今更のように周知の資料をあげて、紫式部が石山寺の化身である説と、石山寺における紫式部の『源氏物語』執筆説を見てきたのは、中世において石山寺を磁場としてそれらの説が融合し、また伝承されていたことを確認しておきたかったからである。

### 『石山寺縁起』の紫式部伝承

紫式部が石山寺で『源氏物語』を執筆したこと、ならびに紫式部は観音の化身であったとする説は石山寺の来歴を説く『石山寺縁起絵巻』にも記されている。『石山寺縁起絵巻』巻四に記される紫式部の石山寺における物語起筆伝承は次のようである。

紫式部は、右少弁藤原為時朝臣が女、上東門院の女房にて侍りけるに、一条院の御叔母、選子内親王より珍しくらん物語や侍ると、女院へ申されたりけるを、式部に仰せられて、作らせられければ、この事を祈り申さむとて、当寺に七か日籠り侍りけるに、水海の方、遙々と見渡されて、心澄みて様々の風情、眼に遮り、心に浮かみけるを、とりあへぬ程にて、料紙などの用意も無かりければ、大般若の料紙の内陣にありけるを、心の中に本尊に申し受けて、思ひあへぬ風情を書き続けける。彼の罪障懺悔の為に、大般若経を一部書きて、奉納しける。今に当時にありきとぞ。此の物語書きける所をば源氏の間と名付けて、其の所変わらずぞ有るなる。彼の式部をば日本紀の局とて、観音の化身とも申し伝え侍り。(31)

ここに記される内容は『河海抄』に記される物語執筆の伝承と重なるが、傍線を施したように、(紫式部が物語を執

筆した場所を源氏の間と名付けて今もある」と、説いているのは縁起に独自の内容として注意すべきであろう。そして周知のことであろうが源氏の間は現在でも石山寺の本堂にあるのである。

さて、この縁起絵巻は序にあたる部分から正中年間（一三二四―六）の成立とされるが、全七巻が制作時の原形を保っているわけではなく、巻一―三は元の形で存しており、巻五がそれに次いで古態を有し、巻四は室町期の転写本で、巻六・七は江戸時代に入ってから転写本というように、複雑な構成を持っている。そして、問題の紫式部の話が出てくる巻四は後の転写本なのである。この巻の詞書は三条西実隆が明応六年（一四九七）に執筆したことが確実にあり、絵は土佐光信か周辺の土佐家絵師の手になることが推測されている。<sup>(32)</sup>とすると、右の紫式部物語執筆の説も、果たして実隆が二百年前の原詞書を写したもののか、それとも新しく取り入れた説なのか問題となるが、そのことに関しては梅津次郎氏が紹介された『石山寺絵詞』の出現で解決することとなった。梅津氏は「研究資料、京都国立博物館蔵『石山寺絵詞』」において、『石山寺絵詞』は詞書のみで、その筆蹟を全巻一筆と認められ、それが現存する絵巻の巻一・二・三の詞書と同筆であること、またその筆者は石山寺座主であった杲守の筆と判断されるとの見解を述べられたのである。<sup>(33)</sup>

杲守は建武二年（一三三五）生れで至徳四年（一三八七）の没、洞院公賢の息である。文学史の面では至徳二年（一三八五）十月十八日に張行された『石山百韻』の連衆の一人で、良基の発句「月は山風ぞしぐれににはの海」の脇に「さざ波さむき夜こそふけぬれ」を付けるなど十一句が載り、『新千載集』以下の勅撰作者でもあった。そして、『石山寺絵詞』と『石山寺縁起絵巻』における巻四の詞書の当該部分を比べるとほとんど異同がなく、そのことから、杲守以前から（紫式部が源氏の間で物語を執筆した）という寺伝があったことが知られるのである。この源氏の間が、石山寺において源氏供養がなされた空間ではなかったかと思っているが、それについては後述しよう。

四 源氏供養の実態

【歌人達の源氏供養】

さて、それでは源氏供養という宗教行為がどのようになされていたかを文献資料から探っていこう。まずは、安居院聖寛の父である澄憲作の『源氏一品経』が手掛かりとなる。澄憲（大治元年（一一二六）～建仁三年（一一二〇三））は藤原通憲（信西）の息、天台僧となつて説法唱導の名手となり、安居院流唱導の祖といわれる。澄憲は『源氏一品経』で、（地獄に墮ちた紫式部が霊となつて人に憑き、夢告によつて罪根の重いことを訴えたので、禪定比丘尼を大施主として、作者の幽魂を救い、見聞の諸人を濟度すべく、道俗貴賤にかかわらず、『法華経』二十八品を書写して、卷々の端に『源氏物語』の卷名を宛てて、煩惱を菩提に転じようとした）と記している。前にあげた『宝物集』に歌人達が寄り合つて『法華経』を書写して供養することが記されていたが、同じ趣旨で行なわれたと認められよう。

ところで、『源氏一品経』に登場する大施主禪定比丘尼であるが、後藤丹治氏の「源氏一品経と源氏表白」により、藤原俊成の後妻である美福門院加賀であることが考証されている。<sup>(34)</sup>そして、その人が施主となつて源氏供養を行った折に作られたと見られる和歌が散見されるのである。

A 『藤原隆信集』元久本「釈教」九五三番

はのはの、紫式部がれうに一品経せられしに、だらに品をとりて

夢のうちもまもるちかひのしるしあらばながきねぶりをさませとぞ思ふ<sup>(35)</sup>

B 『新勅撰和歌集』「釈教歌」六〇二番



紫式部ためとて結縁経供養し侍りけるところに、葉草喩品をおくり侍るとて 権大納言宗家

法の雨に我もやぬれむむつまじきわかむらさきの草のゆかりに (36)

C 『中御門大納言殿集』時雨亭文庫蔵本

源氏の一品くやうしけるところの法会に信解品止宿草庵のころを

かりそめのいほりむすびしことのえにけふよりのりはなやひらけん (37)

Aは加賀と先夫為経(寂超)との間に生まれた隆信の和歌であり、詞書から『源氏一品経』供養の際に陀羅尼品に宛てられた巻の和歌を詠んだことが窺える。「母の」とあることから、通憲が『源氏一品経』を唱えた折の作歌の可能性もあろう。Bは俊成夫婦の女婿である宗家が葉草喩品に宛てられた「若菜」の歌を詠んでいるが、これも『源氏一品経』供養において詠まれたものであることが詞書から分かる。Cの中御門大納言も宗家のことであり、Bと同時期の『源氏一品経』供養に際しての詠歌か、それともまた別の法会で詠まれたものであるかは定かではない。しかし、Bの和歌に「若紫」の巻名が織り込まれているのに、Cには詠み込まれていないので、一応、別の機会であったと考えられよう。ともあれ、ここでも信解品にそくした和歌が詠まれており、澄憲の『源氏一品経』の記述を踏まえると、それぞれが『法華経』の一品を写経の上で、その巻に即した和歌を手向けたことが窺えよう。『中御門大納言殿集』の詞書には「源氏の一品供養しけるところの法会」とあることから、源氏供養の法会がなされ、その場で和歌が詠まれたことを窺わせているのである。

次は藤原実材の母と娘達の和歌のやり取りを記したもので、これも周知の資料である。

D 『実材母集』一四一〜五番

源氏のものごたりをあさ夕見侍りしころ、むらさきしきぶを夢に見侍りて、かの菩提のために、法花経供養せ

させなどして、講おこなひ侍りし時

のりならぬことやはあるとむらさきのふかき心をたづねてぞとふ

をりしもむら雨うちそそきたりしよひのほど、おととむすめ

むらさきのくさ葉もいまやもえいでんこよひいちみの雨そそくなり

かへし

いまやこのみのりのあめにむらさきのかれにし野べのくさももゆらん

源氏講式をかきて、あねむすめのもとへやるとて

なにはえのあまのすさびもみのりぞとかきおくあとはあはれとは見よ

かへし

光あるのりのたまもをかきおくやさとりなざさのあまのこのため<sup>(38)</sup>

実材の母はもと白拍子、はじめ平親清の妻となり数人の子をもうけたが、後に西園寺公経の妾となり、実材（文永四年（一一六八）没）を生んだ。ここでも夢に見た紫式部の菩提を弔って法華経供養をしたとあるが、注意すべきは講を行ったと記されることである。これが源氏供養の法会であったことはまず間違いないだろう。さらに、実材の母は姉娘に源氏講式を書いて与えたとあるが、この講式について、寺本直彦氏は、

実材卿母集の「源氏講式をかきて」は、源氏講式全体の次第を書いたのではなくて、いわゆる楽曲の講式、仏徳を讃嘆した詞章で表白に当たるものを書いたと考えたい。そしてその表白は、女性という立場からすれば、澄憲作の源氏一品経表白のような漢文体のものではなく、やはり和歌集心鉢抄抽肝要に「源氏講式」と称せられているような、本来仮名文の源氏表白であったほうがふさわしいように思われる。<sup>(39)</sup>

と解され、和歌とともに送られた源氏講式は源氏表白であったことを示唆されている。実材の母は娘達と「講」、すなわち源氏供養を行ったのであり、前にあげた中御門大納言が源氏の一品経供養した「法会」を行ったというのも、源氏供養の法会と考えられよう。その法会の場で表白が唱えられ、来られなかった姉娘には和歌と共に表白を送ったのである。送られた表白はもちろん『源氏表白』であったと考えられる。美福門院加賀が施主となって行われた藤原俊成の周辺での法会といい、この藤原実材の母が催した法会といい、源氏供養の実態は、歌人達が少人数集って行われた、極私的な営みであったことが想像されるのである。

#### 【源氏供養と人麿影供】

さて、源氏供養の法会が具体的にどのような行われたかについては、人麿影供が参考になることが先学により説かれている。(40) 人麿影供は、元永元年(一一一八)六月十六日、藤原顕季によって創始された、歌聖柿本人麿を祭る儀式である。歌人たちは人麿を神格化し、肖像を掲げ和歌を献じることによって和歌の道を継ぐ証とした。『古今著聞集』などによれば、人麿影供は六条家においては歌道継承のシンボルとなっていたようだ。敦光の著した『人麿影供和歌』の前半に置かれる漢文体の「柿本影供記」には、影供の際には、まず「著烏帽子直衣、左手操紙、右手握筆、年齡六旬餘之人也」という人麿の画像が掛けられたと記されている。以後、烏帽子を被り、左手に紙、右手に筆を持った直衣姿の老歌仙という人麿像が定着してゆくことになり、有名な佐竹本三十六歌仙絵もこのスタイルを踏襲することになる。

また、人麿影供の具体的な内容を記した柿本講式によると、はじめに人麿の真影を掛けてから、傳供、惣礼頌、着座、法用、表白と一般の講式のスタイルと変わらずに行われたようだ。表白以下三段にわたる式文は(一)、和歌をほめ、二、人丸をほめ、三、素意をのぶの三段から成るが、すべて和漢混淆文で綴られており、『源氏表白』と同じ体裁である。

柿本講式の著者については、山田昭全氏が「柿本講式—報告並びに翻刻—」において、文治四年か五年のころ、安居院澄憲作の『和歌政所一品経供養表白』を手本として、俊恵が書き、そして演じたものと考証されている。<sup>(41)</sup>とすると、源氏表白と同じく安居院に関わる表白ということになろう。

また、安藤亨子氏は、

「人麿影供」と「源氏供養」、この二つは無関係ではあるまい。「准三宮」で「中関白の女」のモデルとして藤原通子が考えられて来たのもこの点から首肯できるように思う。周知のごとく「人麿影供」は元永元年（一一一八）六月十六日藤原顕季によって行われた。そして、通子の母は顕輔女、即ち、彼女は顕季の曾孫にあたる。母の兄弟には人麿像の相伝を受けた清輔がいる。こう血脈を辿ってみると、この源氏供養の背景には、歌の家、六条藤家の、ライバル御子左家を意識した、新しい文化創出のありかたが窺えるようである。<sup>(42)</sup>

と述べられているが、ともあれ、ここでは源氏供養は人麿影供と同様に正式な宗教行事ではなく、歌人達によって営まれてきた、極めて私的な宗教儀礼であることを確認しておこう。「源氏供養草子」はまさしくその法会を物語化したものと言え、その観点から見ると、歴博本「源氏供養草子」が法会の実態を写したものととして貴重なものであることは前章で述べたごとくである。

## 五 源氏供養と紫式部聖像

### 【源氏供養における紫式部画像】

さて、人麿影供が人麿像を掛けて行われたように、源氏供養においても紫式部の画像を掛けて行われたことが考え

られるが、その場合にどのような画像が掛けられていたのであろうか。

武笠朗氏「源氏供養と普賢十羅刹女像」は、美術史研究の視点から『源氏一品経供養』法会の本尊として、和装の十羅刹女像が描かれた「普賢十羅刹女像図」が用いられたことを考察されているが、これは後の紫式部画像への展開を考えるうえで示唆的な説である。(43)

また、伊井春樹氏は『源氏物語の伝説』において、

〈源氏供養〉というのは、具体的にどのようなようになされていたのか分からない。……紫式部の像などを掛け、供養の儀式がなされたのであろう。その折に詠まれたのが、『今物語』に見えるような、巻名和歌ではなかったかと思う。続いて参加者一人一人に、法華経二十八品を分担して書写させ、それをすべて一所に集めて仏前に奉納したに違いない。(44)

と、紫式部の画像を掛けて行われていたことを推測され、時代は下るが、九条種通が弘治元年（一五五五）閏十月から開始した源氏物語聴聞を永祿三年（一五六〇）十一月に終了したことを記念して、同月十一日に開催した源氏物語竟宴を傍証としてあげられる。『源氏物語竟宴記』によれば、竟宴は「雲隠」を含む五十五首の巻名和歌、観音法楽の三十首和歌、連歌百韻の三部から成るが、巻名和歌に関しては、紫式部影を懸けて行われたことが記されており、宮川葉子氏は「詠源氏物語巻々和歌の系譜―源氏供養の伝流を軸として―」で、「紫式部影を懸けて行つたことを勘案すると初期の源氏供養に回帰したい種の思いが窺えるように思う」と考察されている。(45)

【竟宴記】に「石山寺を図して。紫式部此趣向を思ひめぐらすかたち。則如意輪観音の尊像を観じて。絵所土佐将監に図さしむ」と、如意輪観音をかたどった紫式部像を土佐将監に描かせたとあるのは、源氏供養においてどのような画像が掛けられていたかを知る上で興味深い記事である。ちなみにこの土佐将監は土佐光茂のことであるが、光茂

の描いた紫式部画像は見つかっていない。宮川氏はらさに、石山寺蔵の「紫式部画像」と称される類は全て式部が右手に筆を握り、紙と硯が眼前に配される構図で、人麿影の影響が見られることを指摘されているが、これは佐竹本三十六歌仙絵の女流歌人たちの姿とは明らかに趣が異なるのである。そして、石山寺蔵の伝狩野孝信筆とされる紫式部像はその構図で描かれており、それは長らく源氏の間に掛けられていた。

#### 【石山寺蔵の紫式部聖像】

ところで、石山寺には「紫式部聖像」と称される画像が所蔵されている。近年、寺内で発見されたものであり、稿者は十五年くらい前の春に石山寺の豊浄殿に展示されているのを遇目したが、一目でその大きさに圧倒され、これは歌仙絵のような単なる観賞用ではなく、礼拝の対象であろうとの確信を持った。それからずっと気になっていたが、平成二十二年十二月に幸いにも熟覧する機会が与えられたのでその詳細を報告しよう。

この画像は紙本着色の一幅で、寸法は縦が一八一・七糎で横が一四〇・〇糎という大幅のものである。修復がなされた新しい表装が施されている。白畑よし氏の解説によると、かつては香煙により図柄が分からないくらい汚れていたようだ。それが修復によってかなり明かになったが、画面には多くの損傷や剥落が存しており、長い間信仰の対象として懸けられていたことを窺わせている。四周は補修のために裁断されたことが窺え、修復前はさらに大きかったことも想像される。

その図柄は、女房姿の紫式部が右手に筆を持ち、左手は机の上に置いた姿で描かれている。式部の前には文机があり、机の上には料紙と硯・水挿し・筆二本が置かれている。つまり人麿影と同じ構図である。さらにその前に壺形の花器が置かれ、楊柳らしきものが差し入れられている。背景は暗褐色に塗りつぶされており、雲英と胡粉を効果的に用いて式部が闇の中から浮き出てくるように描かれている。式部の周囲には金泥で物語絵が描かれているようで、白畑氏

によると『源氏物語』から六場面が描かれているのだが、肉眼ではどのような図柄かを読み取ることは難しい。また、上方には金泥で四十八行にわたって賛文が書かれている。残念ながらほとんど読めないが、前半には「上東門院此源氏物語」とか「大般若経以六百卷写是」などと見えるから、石山寺における紫式部の『源氏物語』起筆伝承が記されているものと思われる。

さて、この画像で重要なのは、式部の前に花瓶が置かれそこに柳が差し入れられていることである。つまり楊柳観音をかたどった姿であり、聖像と称されるのもそれ故であろう。他の紫式部の画像とはそこが決定的に異なる。石山寺での紫式部信仰や源氏供養を考える場合に重要な資料となるものであるのに、今まで知られてこなかったのは平成八年に石山寺から刊行された『石山寺縁起絵巻』の図録に付録として紹介されただけに止まっていたためであろう。<sup>(46)</sup>

次のページに図録から転載して、その画像の図版を掲げることとする。



© Secondary unavailable



この画像をX線写真により精査された美術史研究の白畑よし氏の報告を次に抄出しよう。白畑氏は『今鏡』や『石山寺縁起絵巻』に記される紫式部の源氏物語石山執筆伝説に触れたあと、次の様に述べられる。

このように文献上でよく知られている観音の化身を意味するような絵像が石山寺に所在していたことが先頃知られるに至った。

この大幅の画面は永年を経てその間に香煙等にさらされた故か、全体が肉眼でははつきりとは見難い状態のままであった。ただ紫式部と思われる顔容が白く浮き出て見えるのと共に、その上方に緑青（絵具）で四十八行という長文の賛（絵の内容に通じる文章や詩歌を記す）が記してあることで、従来知られていた近世の制作の紫式部像とは異なつて、深い意味を合むことが推察される。

それがこの度修復された結果、画面がかなり明らかになつた。さらにX線写真によつて紫式部像以外の図があることも解つたのである。紫式部像と共に同両面に描かれているのは源氏物語五十四帖中の六帖の各々の場面の図であると推察された。いずれも線描のいわゆる白描画であるが、一般の墨の線によるものでなく、賛文と同じく緑青による線であり、極めて珍しい例である。或いは初めから画面の背景が暗色であつた故と想像される。

そうした意味の全体の内容について、或いは賛文に記してあるかと考えるが、いまはその四十八行の大半の文字は消えていて判読が難しい。ただその中で、初行に読まれる「源氏水相観之図」の文句は極めて注目される意味を含むものと考ええる。それは先述の石山寺縁起絵巻第四巻の詞書に読まれた意味である。紫式部が水面にまるで物語の絵のように映し出された形相を眺めて、源氏物語がひらめいたという意味に通じるからである。賛文の「水相観」（冥想によつて感得する仏教的な幻想）に一致すると思われる。つまり源氏物語は仏縁によつて創作されたということとなる。

「水相観」の文字と共に、さらにこの紫式部像の意味が仏縁に結びつくと思われる具体的な例は、その姿の下方に壺のような器が具えてあるが、その中に楊枝（柳）と思われるものがさし入れてある。柳は仏教では吉祥木で一切樹木の王とされ、密教の香水加持法に用いられるという。石山寺で香水加持は秘法としていまに伝えられている由である。この香水加持の意味が示されているとすれば、闇の中に示現したことと共にこの紫式部像は当寺本尊観世音菩薩の化身になぞらえたものであろうと推察される。紫式部の姿、衣裳については、中世の宮仕えの女性と共通した優雅な趣きで、机の前に坐って筆と思われるものを握り思いをこらしている様子である。しかし顔の表情には持にきびしい迫力をこめていて近寄り難いような尊厳な雰囲気を持たせているのは特殊である。しかもほの暗い空間から浮き出たというような幽玄な神秘感が追究されているようである。

制作期については賛文の終りに「戊申白露」の文字があるが、年号が示されていないのではつきりとはしない。全体の作風、特に紫式部の姿は鎌倉～室町時代にかけてのかなりの遺品のある絵巻や三十六歌仙絵等の女人の姿と比較し、また六図の源氏絵の様式が鎌倉末から室町時代にかけての白描画と相似しているなどを考え合わせ、十四世紀末から十五世紀初め頃の作であるうと推察される。

全文をあげることは出来なかったが、右の抄出部分からでもこの画像の重要性はわかる。白畑氏は、この紫式部像は石山寺の本尊である観世音菩薩の化身になぞらえたものであると考証され、十四世紀末から十五世紀初め頃の作と推察されている。白畑氏がX線写真で解読された文末の「戊申白露」が、十四世紀末から十五世紀初めの「戊申」となると、応安元年（一三六八）か正長元年（一四二八）ということになる。まさに能楽が大成された時代と重なるのである。この画像が香煙によってすすけていたことは、実際に掛けられて信仰の対象となっていたことを物語っており、石山寺における源氏供養の法会に掛けられていたことが想像されるのである。

## 六 石山寺における紫式部信仰と源氏供養

### 【源氏の間と源氏供養】

石山寺で源氏供養がなされていたとすると、その有力な場所が源氏の間である。本堂の正堂と礼堂の間に源氏の間は現存し、その「作り合」と称される空間の建造は、建築史研究によると室町時代にまで遡るとされ、<sup>(47)</sup>現在でも二間続きの部屋の奥には紫式部像が掛けられ、往事を偲ぶことができる。しかし、この二間の部屋は「紫式部聖像」を掛けるにはそぐわない。聖像が大きすぎて著しく空間のバランスを損なうのである。この聖像は、その大きさから本堂の壁に掛けて礼拝されるのに相応しく、その一角が源氏の間と呼ばれていたであろう。

さて、この源氏の間が単に紫式部が『源氏物語』を書いた旧跡としてだけの理由で残されたとは思えない。やはり、『源氏物語』と紫式部に関する特殊な信仰空間であったと考えられよう。とすると最も相応しいのは源氏供養の法会であり、それを背景として能《源氏供養》が作られた可能性も浮上してくるのである。

源氏の間がはじめて文献資料にあらわれるのは前に紹介した『石山寺縁起絵巻』巻四の式部が石山寺で『源氏物語』を執筆した段である。ただし、巻四の詞書は実隆の転写であったが、杲守の原本を忠実に写していることから、正中年間には源氏の間が実在していたと考えられよう。

その後、歌僧正広（応永十九（一四二二）〜明応二年（一四九三））の『松下集』に、

六月二日、都へのぼり、聖寿寺の養光庵に着き侍る、去年九月十二日、新御所様（常徳院殿）江州御動座あり、細川右京兆も大津に居給ふ、さ様之儀に同十三日、三井寺仏地院へ越え、上原豊前守申次にて十五日対面申す、

次日舟にて石山へ、仏地院同道にて、昔老僧、古仏地院長算誘引ありて此寺へまゐり、源氏の間にて、これよりもながれし水の源をわづかにくめるすゑをしぞ思ふ、とかき給ひしこと、今のやうにおぼえ侍るに、当仏地院長元一首かきて法楽にと申さるに

源をわずかに汲むもすゑ絶えてはかなく残る水茎の跡<sup>(48)</sup>

とあつて、正広が長享二年（一四八八）に石山寺に詣でた時に、師匠であつた正徹が二十年前に源氏の間で柱に書いた「これよりもながれし水の源をわづかにくめるすゑをしぞ思ふ」という和歌を見つけ、自らも勧められるままに「源をわずかに汲むもすゑ絶えてはかなく残る水茎の跡」と詠んだことが書かれており、十五世紀の後半にも源氏の間はたしかにあつたようである。

源氏の間が文芸人にとって特別な場所であつたことは、次の三条西公条の『石山月見記』天文二十四年（一五五五）からも知られる。

去年の秋比、源氏物語の事など、かれこれ物語して、八月十五夜石山寺にて、かの式部が筆をたてし昔の事、或説ながらかたりつたへたる、あはれ通夜して、かしこの月見侍らばやと申て、すでにおもひたち、俄に法楽のため、かの名号を上にするへて、十五首の哥をつづりしかども、さはる事ありてむなく過し侍り、この事を金后きこしめしつけて、さらば参詣あるべきよしあり、もとより此物語にふけり給て、蓬屋に日々おはしまして、読申一部の功をとげおはしましけり、又宗養法師、紹巴法師、これも同聴のともがらなれば、いざなひ侍しに、いたづらに日を、くらんも心うし、かの源氏の間あたりにて十百韻の連歌をと申せしかば、……ことし天文廿四年八月十四日におもひたち、……かの御寺にひつじの時ばかりにつきぬ、<sup>(49)</sup>

公条は紫式部が八月十五夜に紫式部が『源氏物語』を染筆したことに思いを馳せ、宗養や紹巴の連歌師を伴つて石

山寺を訪れ源氏の間での連歌を企図しているのである。実は、公条の父の実隆も天文二年（一五三三）十月初旬に『詠源氏物語卷々和歌』を石山寺に奉納しているが、それも源氏の中に納められたものである。そこで実隆は石山寺の本尊である如意輪観音の名号を「にほひこよいまは冬より梅もさくわがよのはるにおしなべてみん」と、和歌の各句の冠と沓に置いた和歌も詠んでいるのである。こうした仏の名号を和歌に詠み込むのは、伝為兼「詠源氏物語卷名和歌」や「源氏六十三首之哥」にある型の変形であり、源氏供養を意識したものとされる。<sup>50</sup>

さらに天正十年（一五八二）まで下るが、石山寺蔵の里村紹巴筆『石山千句』の奥書に、

右千句者廿八年をふる夢のうき橋た、もてきてわつかにひとりふたりみたり残りけり世かはりけるにおもはずもかの寺の外護山岡対州御心ひとつにて名ある一切経伝読の料所をもあらためて寄付あれば堂塔のうはふきなどを見て老の目をしほりあけて書写の功を終ければ源氏の間におさめたてまつりぬ<sup>51</sup>

とあって、紹巴が二十八年前の天文二十四年に張行された千句を書写し、源氏の中に奉納したことが窺われる。

#### 【江戸時代の紫式部霊前への文芸奉納】

中世における文人達の源氏の間に対する特別な思い入れの例は以上のようなようであるが、近世においても文芸者達の石山寺における紫式部を尊崇する念は強く、北村季吟・松平吉里・鴨祐為・松平定信・北村季文・堀田正敦などによって『源氏物語』の巻名を織り込んだ和歌が詠まれて奉納されている。それらの歌人達が、源氏の間に掲げられた紫式部の尊像に作品を奉納していることは、源氏供養を意識した文芸行為として注目されよう。

その様相がよくわかる例として鴨祐為の『源氏須磨卷詞沓冠歌』の場合をあげよう。祐為は安永二年（一七七三）の八月十五日の夜に石山寺を訪れている。伝承によると、八月十五夜は紫式部が『源氏物語』を執筆したとされる日である。

かねて今夜は紫式部尊前に参籠せむと思ふあらましきりに、手を折てかそへしけふの日の朝より雨降出ぬれと、思ひたちしを此ま、にはやましとむまのときならむとおもふころより、石山寺にまかる、粟津の松はらすき行はとにや、雨はれて、時のまに雲の塵吹はらふしかの浦かせも心あるかたととるく暮そふころ登山す、法師達も珍しとおほゆるけしきして源氏間といふに伴はる、先式部の尊影を拜して海つらを望めは、月そ山のはにさしのほる、ちかき年はとにかくに曇りて小雨さへそほふりしに、今夜はおもふことなくはれて、清光浪上にうかふ、かの須磨明石の巻をおもひ出て、仮名を上下□□句□□そふれは、百首の数に成ぬるも、月下の露の恵あさからすとそ、<sup>(52)</sup>

鴨祐為は須磨・明石の本文を織り込んだ杳冠和歌を詠むのであるが、傍線部のようにまず源氏の間で導かれ紫式部の尊像を拜して、式部と同じく湖水に映る月影を見ながら和歌を詠るのである。その後、寛政六年（一七九四）八月にそれを清書して納めるが、その折も、

此月下の百首、いさ、かおもふ所あるにつきて、今年葉月十五日登山せしつゝめてに清書の一巻を出し、かきあらためてふた、ひ式部尊の霊前におさむ、今夜の早吟ことさら歌のやうにもあらず、霊前のちり芥かきもすてまほしきはかりになむ

と、紫式部の尊像の前に奉納するのである。これは江戸時代に下つてからの例であるが、歌人達が源氏の間で参集して紫式部を尊崇し、『源氏物語』の巻名を織り込んだ和歌を詠じて、紫式部の尊像に奉納するという、紫式部に対する崇拜の構造は室町期に遡つても基本的に変わらなかつたのではないだろうか。その際に『源氏表白』を唱えるという源氏供養の法会も行われ、そこに掛けられていた画像が「紫式部聖像」であつたと想像されるのである。

残念ながら、石山寺において源氏供養を行ったという記録は寺の内外に見られない。しかし、石山寺を磁場とした

紫式部と観音を一体とする信仰や、紫式部を崇拜した空間と画像の存在、そして、歌人達が紫式部を尊崇してきた文芸行為の軌跡から、源氏供養の法会がなされていたとは考えられまいか。そして、そのような特殊な紫式部に対する信仰を背景として、能の《源氏供養》が作られた可能性を考えてみたいのである。

〔注〕

- (1) 『能楽源流考』（昭和十三年、岩波書店）。
- (2) 新潮日本古典集成『謡曲集』上（昭和六十一年、新潮社）。
- (3) 小西甚一「作品研究「源氏供養」」（『観世』昭和四十七年四月）。
- (4) 新潮日本古典集成『謡曲集』上（昭和六十一年、新潮社）。
- (5) 本文は観世流の光悦本に拠る。（新潮日本古典集成『謡曲集』上、昭和六十一年、新潮社）。
- (6) 引用本文は『室町時代物語大成』第四（昭和五十一年、角川書店）所収の翻刻による。
- (7) 『室町時代物語大成』第四に翻刻と冒頭部分の写真が口絵として載る。その解題には「本書には、後崇光院（貞成親王―一四五六年薨）の筆とする極めが何枚も付してある。近藤喜博氏は、本書の筆跡はそれにほぼ誤りなからうとされた。また、本書はもと「具注暦」の裏に書いたものであること、その証ありと言われた」とあるが、後崇光院筆が定かではないことは本文に述べた通り。現在は行方不明。
- (8) 『未刊御伽草子と研究』四（昭和四十二年、未刊国文資料）、及び『御伽草子新集』（昭和六十三年、和泉書院）に翻刻本文が掲載される。
- (9) 『源氏物語の伝説』（昭和出版、昭和五十一年）。

- (10) 廣田収「(資料紹介) 実相院蔵『源氏供養草子』」(『人文学』一七六、平成十六年十二月)。
- (11) 伊藤慎吾「源氏供養草子」(『お伽草子事典』平成十四年、東京堂出版)。
- (12) 『室町時代物語大成』第四に翻刻本文と、口絵に挿絵の一図が載せられる。また、『日本の美術』「お伽草子」に挿絵四図のうち三図が図版として載る。うち一図はカラー。『室町時代物語大成』の解題には「酒井抱一の旧蔵本である。箱蓋の表に「絵詞 尊鎮法親王真蹟」と記してあるのも抱一の筆か。尊鎮法親王筆の真偽は明かでない。室町末期乃至江戸初期の製作のように見える」とある。現在は行方不明。
- (13) 徳江元正「國籍類書本『源氏供養双紙』を繞りて」(『ピブリア』六十四号、昭和五十一年。後に「源氏供養譚の系譜」と改題して『室町藝能史論攷』(昭和五十九年、三弥井書店)に収録)に一部の翻刻が載る。
- (14) 恋田知子「『源氏供養草子』考—寺院文化圏の物語草子—」(『女と仏の室町—物語草子論』平成二十年、笠間書院)に翻刻が載る。
- (15) (7) を参照。
- (16) (13) を参照。
- (17) (14) による。
- (18) 小峯和明「法会文芸としての源氏供養—表白から物語へ—」(『源氏物語と和歌を学ぶ人のために』世界思想社、平成十九年、のち『中世法会文芸論』(平成二十一年、和泉書院)に所収)。
- (19) 新日本古典文学大系『宝物集』(平成五年、岩波書店)。
- (20) 中世の文学『今物語・隆房集・東斎随筆』(昭和五十四年、三弥井書店)。
- (21) 『今鏡 本文及び総索引』(昭和五十九年、笠間書院)。



- (22) 『日本歌学大系』第四卷（昭和四十八年、風間書房）。
- (23) 『阿仏尼全集』（昭和三十三年、風間書房）。
- (24) 『為氏本源氏古系図』前田家本（『源氏物語大成』十三、昭和六十年、中央公論社）伝為氏筆。凡例に「鎌倉中期ヲ下ラザル書写ノ卷子本一卷」とある。
- (25) 紫式部が観音の靈験により湖面に映る月影を見て『源氏物語』の構想を得たとするのは、あるいは水月観音の信仰とも関係するかもしれない。水月観音は三十三観音の一つで、画像では補陀洛山の水辺の岩上に座して水面の月を眺めている姿で描かれる。後にあげる「紫式部聖像」の水相観とも合わせて考える必要がある。
- (26) 石田穰二・茅場康雄編『源氏大鏡（改訂版）』（古典文庫第五〇八冊、平成元年）。
- (27) 『源氏物語大成』巻七（昭和三十一年、中央公論社）。
- (28) 『紫明抄・河海抄』（昭和四十三年、角川書店）。
- (29) 『石山寺月見記』石山寺文化財総合調査団編『石山寺資料叢書』文学篇第一（平成八年、法蔵館）。
- (30) 碧冲洞叢書第八十七輯『源語研究資料集』昭和四十四年）。
- (31) 『日本絵巻大成』十八（昭和五十三年、中央公論社）。
- (32) 相澤正彦「石山寺縁起絵巻第四、五巻の絵師について」（『日本美術史の杜 村重寧先生・星山晋也先生 古稀記念論文集』平成二十年、竹林舎）。
- (33) 梅津次郎「研究資料、京都国立博物館蔵「石山寺絵詞」」（『美術研究』二二六号、昭和三十八年十一月）。
- (34) 後藤丹治「源氏一品経と源氏表白」（『国語と国文学』昭和五年九月）。
- (35) 『新編国歌大観』第四卷 私家集編（昭和六十一年、角川書店）。

- (36) 『新編国歌大観 第一巻 私家集編』(昭和五十八年、角川書店)。
- (37) 『冷泉家時雨亭叢書 中世私家集一』(平成六年、朝日新聞社)。
- (38) 『新編国歌大観 第七巻 私家集編』(昭和六十四年、角川書店)。
- (39) 寺本直彦「源氏講式について」、『源氏物語受容史論考』昭和四十五年、風間書房)。
- (40) 山田昭全「柿本人麿影供の成立と展開—仏教と文学との接触に視点を置いて」、『大正大學研究紀要 文學部 佛教學部』五十一、昭和四十一年三月)。
- (41) 山田昭全「柿本講式—報告並びに翻刻—」、『中世文学の展開と仏教』平成十二年、おうふう)。
- (42) 安藤亨子「源氏供養草子」、『体系物語文学史』四、有精堂、平成元年)。
- (43) 武笠朗「源氏供養と普賢十羅刹女像」、『源氏物語と江戸文化—可視化される雅俗』森話社、平成二十年)。
- (44) (9) を参照。
- (45) 宮川葉子「詠源氏物語卷々和歌の系譜—源氏供養の伝流を軸として—」、『和歌文学研究』六十二号、平成三年四月)。
- (46) 『石山寺縁起絵巻』(平成八年、石山寺)。この付録として「紫式部聖像」が図版掲載され、白畑よし氏の解説が付される。本稿に掲載の図版もこれを転載させていただいた。
- (47) 山岸常人「伽藍のすがた」、『石山寺の信仰と歴史』平成二十年、思文閣出版)。
- (48) 『新編国歌大観 第八巻 私家集編』(平成二年、角川書店)。
- (49) 石山寺文化財総合調査団編『石山寺資料叢書』文学篇第一(平成八年、法蔵館)。
- (50) (45) を参照。
- (51) 石山寺文化財総合調査団編『石山寺資料叢書』文学篇第一(平成八年、法蔵館)。

(52) 『石山要記』第十二に所収される。石山寺文化財総合調査団篇『石山寺資料叢書』寺誌篇第一(平成十八年、法蔵館)。

〔付記〕

石山寺蔵「紫式部聖像」の調査と図版の掲載については、石山寺の鷲尾遍隆座主と石山寺文化財調査団団長である奥田勲先生にご高配をいただいた。記して深謝する次第である。本稿は国文学研究資料館基幹研究「王朝文学の流布と継承」の研究成果の一部である。